助成実施報告書

２０１９年4月２２日

一般財団法人
熊本放送文化振興財団理事長　殿

夏目漱石記念年１００人委員会
委員長　小野友道
事務局 [redacted]

下記の通り、夏目漱石記念年の記念誌「漱石の記憶　生誕１５０年　没後１００年」の事業実施状況を報告いたします。収支は２０１９年３月３１日現在です。

１．趣旨

熊本ゆかりの文豪夏目漱石の生誕１５０年（２０１７年）と没後１００年（２０１６年）を記念した出版。夏目漱石は五高教師として赴任、４年３か月を熊本で暮らした。県内には漱石の住まいや教壇にたった教室、１８基の句碑などが残っている。

熊本県内の自治体、大学、文化団体、企業などが２０１４年、２年間の記念年に向けた活動組織「夏目漱石記念年１００人委員会」を設立。プレの企画を含め５０余りの事業（講演会、展覧会、ラッピング電車とバス、漢詩や俳句大会など）を繰り広げた。

「漱石の記憶」は、漱石記念年の事業を後世に伝えるために編纂。記念事業の記録をはじめ、研究者や識者の寄稿、熊本の漱石史跡の紹介などで構成した。

２．記念誌

（１）　概要

・編集・発行　夏目漱石記念年１００人委員会

・制作・発売　熊日出版

・Ｂ５判、２００ページ

・発行日　２０１８年１２月７日

・印刷　シモダ印刷株式会社

・初版　３０００部

（２） 主な内容

・カラーグラフィック「漱石点描」

・第１章　寄稿「世紀を超えた文豪」　　９４ページ

主な執筆者（敬称略）　姜尚中、小森陽一、ダミアン・フラナガン、坪内稔典

黒川清、出久根達郎、芳賀徹、長谷川櫂、半藤末利子、中島国彦

・第２章　記念年事業報告　　１６ページ

・第３章　漱石にまつわるエトセトラ　　２６ページ

・第４章　全国夏目漱石顕彰団体紹介　　１２ページ

・第５章　熊本の漱石　　８ページ

・第６章　漱石とその時代　　９ページ

・年譜

３．収支報告

別紙の通り

４．受賞歴

２０１８年熊日出版文化賞

５．その他

・「漱石の記憶」出版記念パーティー

２月１９日、熊本市中央区のホテル日航熊本で開催。

１００人委員会の加盟団体、熊本県文化協会などから８２人参加。

添付書類

「漱石の記憶」出版事業収支報告書（２０１９年3月３１日現在）

２０１９年4月２２日

（1） 収入の部

販売収入	３０６万６０００円	１５３３冊×２０００円
協賛金	３５万円	夏目漱石記念年１００人委員会の会員から
助成金	３０万円	熊日文化スポーツ基金から助成
助成金	２０万円	熊本放送文化振興財団から助成
事務局の一時負担	４８万５７８２円	記念誌販売に伴い減少
合計	４４０万１７８２円	

（2） 支出の部

制作・印刷費	２９８万８００円	熊日サービス開発、シモダ印刷株式会社
販売手数料	９０万５２５０円	１冊６６７円×７５０冊＝５０万２５０円　１冊１０００円×３５７冊＝３５万７０００円　１冊４００円×１２０冊＝４万８０００円（熊日サービス開発など各販売団体へ）
販売電算登録料	3万２４００円	熊日サービス開発へ
送料	１５万６０２１円	レターパック、切手、郵便送料など
著作権料	5万円	
原稿料、謝礼	１５万３９９３円	筆者、協力団体などへ
チラシ製作費	3万円	
雑費	9万３３１８円	
合計	４４０万１７８２円	

（3） 収支状況

４４０万１７８２円（収入）－４４０万１７８２円（経費）＝０円

「漱石の記憶」

「漱石の記憶」刊行 記念年100人委員会

1896(明治29)年、旧制五高の英語教師として熊本に赴任し、４年３カ月を過ごした文豪・夏目漱石(1867～1917年)。生誕150年・没後100年を記念して、県内で催された顕彰事業と、作家や研究者らの講演や論考をまとめた「漱石の記憶」が刊行された。

2014年に発足し、記念事業などに取り組んできた夏目漱石記念年100人委員会(小野友道委員長)が制作。作家の 出久根達郎さん、俳人坪内稔典さん、中島国彦・早稲田大名誉教授らの文章を収録している。ほかに長谷川櫂さん、姜尚中さん、小森陽一さん、ダミアン・フラナガンさん らも合わせ、講演・執筆者は計23人にのぼる。

作家の故井上ひさしさんの1996年の熊本市での講演も再録。漱石に傾倒した中国の文豪・魯迅が、漱石のように自分自身を研究し、自己をつかもうとしたと紹介。井上さんは「ほんとうに漱石は思想の大きな貯水池です」と語っている。

2014年からの顕彰事業で取り組んだ創作劇や企画展、シンポジウムなども紹介。熊本の漱石の句碑、小説「草枕」「二百十日」の舞台も掲載している。熊日出版、２千円。県内主要書店で販売。　　(中原功一朗)

熊本日日新聞社

2018年12月24日朝刊

熊本日日新聞

2019年1月20日朝刊

「漱石の記憶」

数々の作品 見つめ直す契機

夏目漱石記念年100人委員会編

昨年の十二月『漱石の記憶』が出版された。これは、夏目漱石の記念年にちなみ、識者・研究者の寄稿をはじめ「記念事業」や「熊本の漱石」「漱石とその時代」等を特集しながら深く漱石の姿を探り出そうとしている。

二〇一六年は、漱石没後一〇〇年であり、また来熊一二〇年とも重なった。翌二〇一七年は生誕一五〇年にあたるため、この二年間を夏目漱石記念年として活動が繰り広げられた。本書はその総括である。この活動の中心になったのが「夏目漱石記念年100人委員会」である。

記念年のオープニング式典は、二〇一六年五月十四日であった。ところがその一カ月前、あの未曽有の熊本地震に襲われる。このとき誰しも漱石のことなど頭から吹き飛んでいたことだろうが、地震から一カ月後、漱石記念式典は予定通り開催されている。奇跡的である。

この時、基調講演の姜尚中氏は、地震後急遽テーマを変えて「漱石の死生観―熊本地震を生きる」と題して講演している。本書冒頭に掲載されている内容は、熊本地震を体験した人には感動的であろう。

漱石は、人は「因果」がわからないながらも生きるに値し、さらに「憐れ」ということを知ることを語り、作品の中に表している。人々は、憐れを通して互いに共感を持つ。今回の熊本地震でも多くの人が実感したのではないかと姜尚中氏は語っている。

寄稿は、姜尚中氏のほか、芳賀徹氏、小森陽一氏、坪内稔典氏、さらに長谷川櫂氏など二十余人の多彩な顔ぶれである。これら識者・研究者の皆さんの漱石作品に対する視点や思いは多様で奥深く、一般読者からすると新しい発見を含めて、漱石と作品を新たに見つめ直す契機になっていくかもしれない。

熊本地震後の復旧・復興真っ只中の二年間で『漱石の記憶』が出版できたのは驚きである。漱石の世界を再度学び楽しむため、本書は多くのことを教えてくれるだろう。

評・吉丸良治（県文化協会名誉会長）

熊日出版・2000円

※夏目漱石記念年100人委員会　熊本県、熊本市、玉名市、阿蘇市をはじめ県内の83団体で組織。漱石生誕150年と没後100年の記念事業を展開した。

漱石の記憶―

浮かび上がる多様な姿

細川忠利―

今後の研究発展の基礎

花畑屋敷―

城下変遷 美しい図版で

熊日出版文化賞 受賞作決まる

マイブック賞「Heritage―」 センス良い写真集

第40回熊日出版文化賞の本選考が15日、熊本市中央区の熊日倶楽部で開かれ、熊日出版文化賞3点と自費出版作品に贈るマイブック賞1点を決めた。

【1面参照】

出版文化賞の「漱石の記憶 夏目漱石生誕150年 没後100年」は、県内83団体でつくる夏目漱石記念年100人委員会（小野友道委員長）が作家や研究者らの講演や論考を集約。「執筆陣の顔触れが面白く、多様な漱石像を浮かび上がらせた。記録性と資料性にも優れている」と評価された。

「細川忠利 ポスト戦国世代の国づくり」は、熊本大永青文庫研究センター長の稲葉継陽教授(51)が、戦国後の新たな国づくりを担った忠利の統治を読み解いた。「第一級の史料を使って論拠を明示しつつ、忠利の生涯を興味深く読ませる。忠利に関する今後の研究発展の基礎となる」とたたえられた。

「花畑屋敷四百年と参勤交代」は、県文化協会名誉会長の吉丸良治さん(80)が、熊本城下の花畑町や桜町一帯の変遷と歴史を、写真や地図でたどり、解説を加えている。「桜町再開発事業が進められている中、時宜を得た出版。豊富な資料を基に装丁や図版も美しくまとめている」と評された。

マイブック賞の「Heritage 先祖からの贈り物 藤崎節子キルト作品集」は、藤崎さん(80)＝熊本市＝が、嫁ぎ先の藤崎家住宅「赤松館」（芦北町）に残る着物や帯で制作した作品の写真集。「大胆な図柄でセンスが良く、上品。熊本の歴史・文化の価値を見いだしていく過程も面白い」とされた。

熊日出版文化賞は、県内の個人・団体の優れた著作を毎年顕彰。今回は2018年に刊行された約100点を対象に、2月の社内選考で候補作14点を選んだ。

（魚住有佳）

本選考の委員は次の通り（敬称略）。幸田亮一（熊本学園大学長）高濱州賀子（美術史家）富田紘一（熊本城顕彰会理事）松木良介（グラフィックデザイナー）岡本智伸（東海大農学部教授）木下優子（県立図書館参事）荒木正博（熊日編集局長）

熊日出版文化賞の候補作について意見を交わす選考委員たち＝15日午後、熊本市中央区の熊日倶楽部（池田祐介）

受賞者コメント

漱石顕彰に役立てて

「漱石の記憶―」の編集者代表、小野友道さん 夏目漱石記念年100人委員会の活動の集大成で大変うれしい。今後の漱石顕彰のために役立ててもらえたら。特に若い人たちが漱石の文学を学ぶきっかけにしてほしい。

リアルな歴史像知って

「細川忠利―」の稲葉継陽さん 長年の研究成果を一般向けに書いたもので評価されうれしい。永青文庫には江戸時代初期の類いまれな1次史料があり、そこから描き出せるリアルな歴史像を多くの人に知ってほしい。

中心地 歴史残したい

「花畑屋敷四百年と参勤交代」の吉丸良治さん 大変ありがたい。花畑町や桜町は熊本城とも関わりが深く、熊本の中心地の歴史を残しておかねばならないと思ってまとめた。多くの人に読んでもらえたらうれしい。

作品作り続けたい

「Heritage―」の藤崎節子さん ライターやカメラマンに恵まれた。本は海外の美術館にも置かれたと聞く。あと何年できるか分からないが、先祖から残された着物などに光を当て、作品作りを続けたい。

熊本日日新聞社

2019年3月16日朝刊